

橋 耕 齋 伝

中 村 喜 和

まえおき

一橋大学図書館に、『和魯通言比考』という表題をもった古い和露辞書が収蔵されている。扉を見れば、一八五七年、サンクト・ペテルブルグ刊とあり、編者I・ゴシケーヴィチの下に、協力者として日本人、橋耕齋の名がしるされている。橋耕齋とは何者であろうか。この一文は、今から百十余年前ロシアの首都にあって、一冊の日本語ロシア語辞書の編纂に助力を与えたひとりの日本人の生涯を述べようとするものである。

耕齋は学者ではなかった。いかなる意味の著述家でもなかった。耕齋の名は、右の辞書の成立にさいして協役を演じた者として、またペテルブルグ大学における最初

の日本語教師として、わずかに学問の世界に跡をとどめているにすぎない。それ以外に耕齋が多少なりとも記憶に値する人物であるとすれば、幕末の動乱期にはじめて日本を密出国し、明治初年までのほぼ二十年間をロシアで過ごした人物としてである。あるいは、日露交渉の短からぬ歴史に登場する最も風変わりな個性のひとつとしてである。『大日本人名辞書』は耕齋を「畸人」と定義した。ほかに「怪僧」、「悪漢」の評もある。拙文に学者や作家の伝記を期待されるかもしれぬ読者のために、まずこのことを断っておかねばならない。

先ほどの辞書のことを、もうすこし書いておく。扉の左肩に「外務省洋語学所記」という大きめの角型朱印がおされており、そのよこに、さらに大きい六・五センチ

角の「高等商業学校図書印」という朱印が並んでいる。

外務省付属洋語学所は通訳養成の目的をもって明治四年に設立され、独露清の三ヶ国語を教授した機関であり、明治六年には文部省に移管され、東京外国語学校に吸収された。一方、高等商業学校とは一橋大学の明治二十年から三十五年までの呼称である。それより早く明治十八年に東京外国語学校は、高等商業学校の前身である東京商業学校に合併されていた。つまり、この辞書は外務省洋語学所から東京外国語学校に移され、さらに高等商業学校の蔵書になったことがわかる。明治三十二年に東京外国語学校がふたたび独立したとき、なぜかこの『和魯通言比考』は、他の二百冊あまりのロシア語図書とともに、置いてきぼりをくったものらしい。

明治二十年ごろまで、わが国にはきわめて不備なロシア語辞書しか存在しなかった。江戸時代の漂流民関係のものを別にすれば、榊令輔『魯西亜字筌』（安政二年）、イワン・マホフ『ロシヤノイロハ』（万延二年）、山本某『魯西亜単語篇』（明治四年）、大島良一『魯語柱礎』（明治四年）、緒方惟孝『魯語箋』（明治六年）、ニコライその他『寿路和里』（明治八年？）などが刊本あるいは写本

で流布していたが、それらは辞書というよりも単語集であった。四六倍判（B5）、四百六十二ページ、収録語数一万八千の『和魯通言比考』とは雲泥の相違である。

しかるにこの辞書は、明治の前半に盛んに用いられた形跡がない。外国で出版されたという事情、見出語がロシア語でなくて日本語であるという不便さが、その流通を制約したのかもしれない。現在この辞書は二十部あまりが日本各地の図書館あるいは個人の所有に帰しているが、そのうち明治初年から所蔵者が確実に判明しているものは、一橋大学蔵書と静嘉堂文庫に収められているものだけである。今世紀になって外国から輸入されたものが、少なくとも五冊ある。静嘉堂蔵書は幕府からロシアに派遣された市川文吉の手沢本で（最初の所有者は耕齋自身か）、愛書家としても知られた大槻文彦が明治四十五年のある展覧会に出陳された他の一本を見て「流涎」し、ようやくこれを手に入れて「珍藏」という奥書を付している。さすがに明治二十年代以後は文部省編『露和字彙』（明治二十年。増訂版、明治三十六年）、高須治輔『魯和袖珍字彙』（明治三十六年）、二橋謙『日露字典』（明治三十七年）などが出版されたので、明治末年には

『和魯通言比考』はもはや骨董品として珍重される存在に化していたのである。

耕齋の伝記に戻ろう。実は伝記資料として、彼自身の筆になるものは全く知られない。後に述べるように、『和魯通言比考』のなかの漢字と仮名は、耕齋の手であることがはっきりしている。したがって彼の筆跡は、いつでもわれわれが見ることが出来る。しかし、およそ耕齋の文章というものは、俳句一句をのぞいて、何ひとつ伝わらない。彼の履歴に関して伝わるのは、耕齋の知人が日記や書簡や回想記のなかで述べたもの、墓碑に刻んだもの、あるいは巷間の風評にもとづく新聞記事の類のみである。すなわち、大部分が未確認情報といつてよい。その上厄介なことには、耕齋自身、相手により時によって、身の上話の内容を変えたりしいふしがある。その結果、生前はもとより没後になっても、さまざまな関係者の描く耕齋像は非常に大きな振幅をもっている。彼の場合は、棺を蓋うてなお事の定まらざる顕著な例といえよう。

ここでは各種のデータを取捨選択して整合的なものだけを記述する方法をあえて避け、かならずしも網羅的ではないにしても、ほぼ確実なもの、事実かもしれぬもの、

幾分なりとも疑わしいものなどを含めて、なるべく多くの材料を羅列し、それぞれに筆者が自分なりの評価を下すことにした。読者諸賢がこの評価をそのまま採用される必要のないことは言うまでもない。

一

橋耕齋の生涯はおよそ三つの時期に分けることができる。第一は三十五歳で日本を離れるまでの時期、第二は十九年間のロシア時代、そして第三は帰国してから没するまでの十一年間である。

耕齋の生涯の第一期、すなわち出生から壮年にいたるまでの時期は、資料が最も少なく、わかりにくい。第二期についても、第三期についても、耕齋と交わった人が判明していて、彼らが何らかの記録を残してくれている。ところが、三十代のなかばまでは耕齋の付き合った人物は、名前さえ皆目知られていないのである。

耕齋は文政三年（一八二〇年）に生まれた。彼の生年を記しているのは、芝白金の源昌寺に立っている墓碑である。撰者長瀬義幹は長崎五島の人、主として農商務省に官吏として勤め、耕齋晩年の知己であった。弘化三年

の生まれというから、耕齋より二十六歳の年少である。

長瀬氏の墓誌は、耕齋の前半生をこう要約している。

「君初姓名曰立花久米藏、家世遠州掛川藩士族也、君弱冠時、善砲術、喜任俠、後有故披刺、居池上本門寺為幹事」(原文には句点がない。便宜ここに付した)。

耕齋が遠江国掛川藩士の家に生まれたという点に関しては、ほとんどすべての資料が一致している。しいて言えば、幕末から明治初年にかけて数少ないロシア語通辞のひとりとして活躍した志賀浦太郎が、後年その回想記のなかで「何でも譜代大名の内の堀田備中守か板倉周防守かのお茶坊主で有った」と述べているのが、唯一の異説である。これは耕齋出生当時の掛川藩主太田資始が堀田家の一族からの養子であったことにもとづく誤った記憶であろう。太田備後守資始は天保二年から三年間京都所司代を勤めたのち、天保八年から同十二年まで、幕府老中の職にあった。

耕齋とペテルブルグで親しくなった幕府の留学生山内作左衛門は、江戸の父親にあてた手紙のなかで「魯国に日本落人橋耕齋と申もの居り元掛川藩のよし、君侯執政の節御部屋番又は祐筆など相勤候哉にて公辺の事を可成

り存居り申候」と述べているし、また、おなじころペテルブルグをおとずれて耕齋と面談する機会があった薩摩藩留学生の森有礼も、その『航魯紀行』に「此人は本来遠州掛川の藩ニ而、太田摂津守の重役と聞へたり。摂津守大坂御城代□京師諸司代及び幕老杯を勤めし頃、此人随従し執権職を勤めたりしとかや(自身)と書きつけている。

掛川藩主が京都所司代に任じられていたのは耕齋が十一歳から十四歳までのとき、老中の職にあったのは、十七歳ないし二十一歳のときである。この年齢から考えて、耕齋が藩主の「重役」であったり「執権職」を勤めたりしたということは、やや信じがたい。当時の武鑑を検索しても、耕齋とおぼしき人物の名はあらわれない。森有礼がその紀行文の耕齋についての記事の最後に、「以上皆自身の話也。間々信シ難キ所も多し」とわざわざ感想を付け加えているのも、うなずける。ただし山内作左衛門の言うように、「御部屋番又は祐筆など相勤」めたこととはありえたであろう。

耕齋には立花(橋)のほかに増田という姓があった。ロシア側の伝記資料として最も早く、かつよくまとまっ

ている『ペテルブルグ大学教授講師伝記辞書』によれば、彼の日本名は「マスダクメザイモン」である。墓碑にある「君在異域二十余年、而得帰更称増田甲斎」の一節は、帰朝後あらたに増田姓を冒したと解すべきではなく、甲斎の甲の文字に力点が置かれているのであろう。要するに、耕斎は母国出奔前にすでに立花、増田の二姓をもち、久米蔵あるいは久米左衛門の二つの名を称したことがあったにちがいない。コウサイもすでに出国前の号であったと信すべき理由がある。

武鑑には文政二年（一八一九年）から天保八年（一八三七年）まで、掛川太田家の用人のなかに増田市郎兵衛の名が見える。あるいはこれが耕斎の父か、それとも一族の者ではなからうか。いかなる史料にもとづくか不明であるが、石井研堂氏は昭和初年の新聞に寄稿した耕斎略伝のなかでこう述べている。「……太田撰津守の臣下に、立花四郎右衛門といふ下目付があった……この四郎右衛門に三子あり、第二男を象蔵といった。」市郎兵衛と四郎右衛門のあいだに何らかのつながりはあったかもしれないが、姓は一方は増田、他方は立花と異なっている。なお、増田は現在でも掛川とその近在によく見受け

る姓であるという。

耕斎は年若くして砲術に通じたと碑文は伝える。『大日本人名辞書』はこれを敷衍して、「甲斎資性磊落豪放にして夙に武術を好み能く砲術に達せるを以て薩摩、水戸等の武術家と交通往来す」と述べている。山内書簡は「何国にや六甲山の辺に住て六甲亭と唱る鉄砲の師に使へて奥儀を得よりて耕斎と唱るよしを云」と、さらに詳しい。「鉄砲を習ひ、又柔術を励んでは、敢て人後に落ちなかつた」というのは石井説であり、「我幼少の時より和漢の学立志深く」とは、耕斎自身が万延元年に訪問先のニューヨークで新見正興らの遣米使節団の一員に語ったとされる言葉である（これは伝玉虫左太夫の『米航日記』からの引用の孫引きであるが、後に述べるように、信憑性に問題がある）。

しかし、耕斎はなぜか武士として身を立てなかつた。彼の生涯の最初の転機となった武士廃業をめぐっては、次のように多種多様の説明が行なわれている。「一人の善士を有罪人と見居て仕置二行ひて大ニ人望を失ひ」（森有礼）、「天保年間根津の遊廓盛んなる時は地廻りの随一と称せられ曾て狹斜中にて大喧嘩を仕出し幕官の物

色を受け命惜さに脱走し」(明治七年、郵便報知新聞)、
 「主家の宝物や什器を盗んでは叩き売つて女郎買ひはする酒は飲む博奕は打つと云ふ三拍子揃った厄介物で遂に邸にも居られず逃げ出し」(志賀浦太郎『昔語り』、大正四年、長崎日日新聞)、「まだはたち前のこと、恋愛関係で、同藩中の一婦人を殺害し、郷里に居たたまらないで江戸に出奔し」(石井研堂氏)等々。明らかなことは、時代が下るにしたがって耕齋の行状の伝え方ははなばなしくなってくることである。耕齋と最も早く、しかもかなり親しく往来したと考えられる山内作左衛門は、単に「年少にして父の家を出て」というだけで、家を捨てた理由を明らかにしていない。晩年耕齋の最も身近かにあった長瀬義幹も、「後故有リテ」と語るのみで、その「故」の内容を説明しない。伝説の成長がこのようなのであるとすれば、耕齋が少年時代、「この掛川で、藩祖道灌公を知らないものがあつても、この条藏を知らない者は有るまいといふのがおほこで、郷党の間では、ほら桑の名で通つて居た」という石井情報は無条件には採用しがたい。この叙述の講談的なスタイルも、資料としての信頼度をひくめている。

最も好意的な見方は、耕齋が武術に長じていたために「当時柔弱なる東国武士と合はぬより一藩の為め嫌忌せられ、遂に藩を脱して浮浪の身となりし」という、明治十九年の郵便報知新聞に掲載された追悼記事である。この文章を草した記者は、十二年前のおなじ新聞を読み返さなかつたらしい。三年後の大同新聞に耕齋略伝を投書した野口北巖なる人物も、この部分は郵便報知の新しい記事を踏襲している。

つまるところ、耕齋が武士の身分を捨てた理由には疑問符をつけておかねばならない。

二

耕齋の生涯の第一期の後半は、国内流浪の時期である。前述の明治十九年の郵便報知新聞によれば、そのもようは次のとおりである(『大日本人名辞書』にはこの記事がほとんどそのままとり入れられている)。「諸藩主其砲術を愛し幣を厚うして召聘せしが二君に仕へずとて固辞し諸所漂泊中其気性の剛毅なるを以て博徒等に推され一時其頭分と為り豪遊放態度なく屢々法網に触れて獄に下りしこと三回一朝翻然として大に悟る所あつて雍髪し黒

衣を着け桑門に帰依し程なく池上本門寺の幹事に挙げられ大に用ゐられしが其事務の紛雜なるを厭ひ窃かに同寺を去て雲水に身を寄せ諸国行脚のすえ伊豆国の某寺に錫を留め碧山蒼海に対して浮世の塵垢を脱し閑かに月日を送る。この記事ではどのような経緯で「法網に触れ」三度も下獄したかぼかされている。山内作左衛門の手紙にも「博徒に入、外いろ／＼の悪業も有之候」とあるだけである。森有礼の『航魯紀行』には「僧と成り、三ヶ年にして一寺を得、其時女の事ありて又還俗して卜筮医術ばかりウチ杯を以て四方を遍歴し」とあって、「悪業」の内容をやや具体的に示している。ここでは「悪業」と「薙髮」の順序が逆になっているのが注目される。博打について言えば、もともと掛川は海道筋、大小を捨てた青年耕齋がまず渡世人の群に身を投じたとしても、不思議ではない。「女の事」については大同新聞に野口氏が「或る時川崎近方なる農家の娘と私に通し」ついに嬰子殺しを犯すにいたった事件を述べ、医術に関しては、東海道で雲助を働いたり乞食に落ちぶれたりしたあげく、医者にばけた耕齋が「相州藤沢在の豪家の一人娘」にインチキ治療をほどこした話を、志賀浦太郎が長崎日日新

聞の記者に語っている。これらの内容はいづれもあまりにも出来すぎていて、瓦版か赤新聞の記事のもっともらしい焼き直しとしか思えない。ただし、耕齋としばらくは直接交際した志賀浦太郎が、たとえそれから四十年あまり後の回想とはいえ、このような荒唐を信じこんでいるかみえることは（彼はこれを耕齋の口から聞いたと主張している）、耕齋自身の性格のなかにも、よほど、スキャンダルの主人公となってもおかしくないような点があったのかもしれない。その青年時代の資性は、あるいは「磊落豪放」、あるいは「放蕩無頼」であったという。既成の身分の枠を乗り越えた耕齋には、法律やモラルの枠内にとどまらぬ行動が多々あったと見なければならぬ。もうひとつ、天保末期から嘉永にかけての時代の側にも、耕齋をそのような行動にかりたてる働きがあったにちがいない。

耕齋が離藩後、博徒と交わったり仏門にはいったりしたほかに、蘭学を修めたという説もある。玉虫左太夫に帰せられる『米航日記』に、「中年に至りて大坂に出て、緒方弘庵先生に仕へ蘭学をなせしものにて云々」という一節のあるのが、その根拠である。耕齋の滯露中ペテル

ブルグに派遣された留学生のなかには、すでに言及した市川文吉や山内作左衛門のほかに、洪庵の三男緒方城次郎（後の惟孝、つまり『魯語箋』の著者）がいた。もし耕齋が有名な洪庵の適塾に学んだ時期があったとすれば、なぜ彼はそれを留学生たちに打ち明けなかったのであるうか。山内の家郷への通信は、耕齋の蘭学修業については全く口をとざしている。

『適々塾姓名録』には嘉永三年晩春の入門者として「遠州掛川 本間恒哉」の名が記載されているという。恒哉が耕齋の別字であるとすれば、このとき年はちょうど三十歳。すでに相当に放浪の生活を送ったあとでなければならぬ。洪庵門人としては安政二年入門の福沢諭吉より五年先輩にあたる。耕齋が西洋の学問に志したことがあったか否かという点は、彼の日本脱出が能動的なものであったが受動的なものであったかともかわる重要な因子であるが、残念ながらこれについても断定は不可能であると言わざるをえない。

耕齋にとっては何度目かの転機、そしてわれわれにとってはそのゆえにこそ彼の名を歴史のなかに見出すにいたった転機は、安政元年から二年にかけての冬、伊豆半

島の西海岸の小村戸田で、彼がロシア人と出会ったことである。ロシアの使節プウチャーチンがバルラダ号に塔乗して長崎をおとすれたのは、それより一年あまり前の嘉永六年（一八五三年）のことであった。プウチャーチンの一行はその翌年には旗艦をディアナ号にかえ、極東ロシアから箱館を経由し、大坂に回航してから、十一月には下田に入港して、そこで日本側の代表団と会談をはじめた。ところが会談開始三日目に大津波が下田港を襲った。ディアナ号はこのために重大な損傷をこうむり、修理のために戸田に向かったが、途中で沈没してしまった。五百人近い乗組員は幕府の許しと援助を得て、戸田村で新船の建造に着手することになった。士官以上は宝泉寺、下士官は本善寺、兵卒は急造のバラックを宿舎とした。まさにこのとき、耕齋はおなじ戸田の蓮華寺に寄寓していた。伊豆には太田藩の飛地があったので、戸田はおそらく耕齋にとって以前から馴染みの土地であった。ロシア人をしたって僧形の洋学志望者が戸田に乗りこんできたと思像することは、多分不可能である。なぜなら幕府はこのとき戸田に通ずる真城越・修善寺越・小土肥越などの各要所に関所を設けて、事の洩れるのを厳重に

防いだといわれるから。

ブウチャーチン使節団に中国語通訳として加わっていたのがゴシケーヴィチ、すなわち後の『和魯通言比考』の編者である。ヨシフ・アントノヴィチ・ゴシケーヴィチは一八一四年の生まれ、三九年にペテルブルグ神学校を卒業し、北京におもむいてこの地のロシア・ミッシンの一員になった。それから四八年までの九年間は中国で布教活動に従事し、帰国して外務省アジア局に勤務した。ブウチャーチン提督が皇帝の使節として日本に派遣されるにあたってその随員にえらばれたのは、中国語と満州語の知識を買われたためである。ゴシケーヴィチはこの機会を利用して日本語を研究する希望をいだいた。しかし長崎ではこの願いを果たすことができなかった。「日本人の通辞たちが自国語の知識を提供することを明らかに嫌った」(『和魯通言比考』序文)からである。次の航海で偶然にも戸田に滞留を余儀なくされたゴシケーヴィチは、日本語の情報提供者を得ようとねらっていたにちがいない。

『大日本人名辞書』は耕斎がロシア人と知り合った事情を、例によって好意的に描いている。「嘉永四年の頃

露国の商船我が日本海を航行して其船体を破り伊豆の海岸に寄港して修繕を加ふるあり時に其の船長某上陸し偶然来りて甲斎の廬を叩く甲斎延きて厚く之を遇す某大に喜び滞港中屢来りて漸く相ひ親しむに及び伴ひて露国に帰らんことを乞ふ甲斎平生好みて訳書を読み聊か外国の事情を知るを以て之を好機と為し出でて異邦に遊ぶを惟ふ乃ち為めに意を決して同船に塔じ露国に渡航す」(傍点)は中村、明白な誤りを示す。

これとは全く正反対の見方をしているのが、明治七年の郵便報知新聞の記事である。筆者が国会図書館で閲覧した同紙は惜しいことに虫喰いがある。以下の引用でその部分がそれである。「頃は安政年間魯西亜の軍艦下田港碇泊中海嘯に船を破られ同戸田に廻り修復せしことありしに其船將徒然の余り此近傍に学識先生はなきやと問に答へる辺鄙の農民彼の御寺の御坊こそ過去未来の善智識と教るままに遊歩の序問ひつ語りつ手真似と筆談南京コックの大意通弁固より弁舌世才に妙なる茶坊主の旧面目自ら靈犀一点の通するよりして国家の内事物産の善悪告るに随ひ恵むは彼れの方便魯將の氣に入り彼是と注文受けて……送り釈迦も孔子も錢で転ぶが世の習ひ思は

ず……日本の地図類迄送つた末儲けた金は円か方……くなるままに魚は喰ひたし独寝の寒き山寺……ふぞ彼の三國一の富士額ひ三島の駅なる飯……る御対面……け遣ひ散らした……の密告……敵しき……刺す……行く振をなし食はず沼津に足早く足柄山を忍ひ抜け東西構はず暗の夜に日本近き黒船の内へ窃に流れ込み云々と哀訴に及へは魯將も流石に黙止しがたく其儘連れ行く。」虫喰いを補う意味で志賀浦太郎の『昔語り』から相当する個所を掲げよう。「耕齋はゴシケヴキチから地図や地理書の買入れを頼まれただ五拾兩の金を貰って小田原に買出しに出掛けた、日本の本は安いから五六兩丈け買込んで残りは女郎買ひなんかで使い果して風呂敷包を昇いで帰つて来た、当時の探偵、即ち岡つ引、目明し連中が地図や絵本を沢山買った者が有る事を探知して敵密に捜査すると本の代価に支払つた金が見馴れないもので段々調べてみると斯様々々の坊主が買ひに来たと判明したので的切り露西亞人に売込むに違ひないと云ふ事が判つた、是は由々しき大事だと捕手の面々が寺へ召捕りに乗込むと耕齋も天に翔り地に潜る術なくてゴシケヴキチの室に遁げ込み匿まつて呉れと頼んだ、事の起りは国禁品を買つ

たのあるから捨て、も置けず直ぐ承知して室内に隠した、捕手の面々は耕齋の隠れて居るのが判つて居るが踏み込む事は出来ない、而して愈々ブーチャチン一行が戸田を出発し帰国する際に耕齋を残して行けば首が飛ぶ事は疑ひなく助けて呉れと縋るので見殺しにする訳に行かず、寺からは鞆に忍ばせて運び出し船に乗せて云々。」

米国の日露交渉史研究家のレンセン氏が耕齋をスパイと呼んでいるのは、『北海道に於ける露西亞文化』、右のような記事にもとづいている。

耕齋はロシア滞在中、自らの出国の事情をふかくは語らなかつた。はじめて出会つた同胞である山内作左衛門は「吾等には颯にあひて漂着せしといへり」と日記に書いているし、森有礼は「魯国の軍艦壹艘遠州洋にて颯に逢ひ、其節其艦ニ信を求め通して艦ニ乗込ミ」と『航魯紀行』に述べている。ロシア側の資料も、日本人増田が戸田でゴシケヴキチをしばしばおとされたこと、増田が日本に関する情報を提供しているのではないかと疑つた日本政府が彼を逮捕しようとしたこと、そこで増田は箱に入れられ荷物として船に積み込まれたこと、などを述べているにすぎない(『ペテルブルグ大学教授講師伝

記辞書』。この記事が後にブロックガウスなどの百科辞書に再録された。)

耕齋がロシアにあっても、自分が鎖国の禁令を犯したことを絶えず意識していたであろうことは、想像にかたくない。したがって絵図や地理書をゴシケーヴィチに提供した事実がかりにあったとしても、そしてその発覚が密出国の主要な動機であったとしても、その事実を同国人に告げることは避けたであろう。しかし、耕齋に対して最も悪意ある見方をとり、その後の耕齋悪漢伝説の源泉となった明治七年の郵便報知新聞の記事にしても、明確な根拠があるわけではない。これをそのまま信用することはできない。

ゴシケーヴィチが戸田を出発するにさいして「若干の日本語の書物」をもっていたことは、彼自身が『和魯通言比考』の序文で明らかにしている。それは「日本人たち(複数であることに注意されたい——中村)の贈物」であったという。またゴシケーヴィチの没後、彼の日本語の蔵書約百点が科学アカデミーに寄付され、そのリストが最近刊行された。そのなかにはたしかに寛政年間の『東海道名所図会』や天保年間の『江戸名所図会』その

他の「絵図や地理書」の類が含まれているが、これらは後にゴシケーヴィチが最初のロシア領事として一八五八年から六五年まで箱館に駐在したあいだに購入したものと説明されうる。

外国の研究家のなかには(たとえばソビエトのフアインベルグ女史や前述のレンセン氏)、耕齋が豆州戸田ではなく蝦夷の箱館からロシア艦に乗りこんだという説をとる者がある。その根拠となっているのは、ほかならぬプウチャーチン提督の本国への報告書で、一八五六年八月の『海事集録』^{モルスコイ・ズボルク}に掲載されたものの一節である。それによると、一八五四年十月(露曆。邦曆では八―九月)ディアナ号が箱館に碇泊中、ひとりの日本人漁師が小舟に乗っておとずれて、船内にとどまることを希望した。いったんは拒絶して彼を帰したが、出帆直前にふたたび小舟でやって来ておなじことを頼みこんだ。この男は犯罪人ではなく、ただロシア人が好きになったものらしかった。そこでプウチャーチンは彼は連れていくことにし、ほかの日本人に気づかれないような手段を講じ、従卒とした。艦長の処置と彼自身の気転によって、陸で過ごした三カ月のあいだ、さしも疑いぶかい日本の役人

もこの男に気づかなかつた。彼は今アムールの河口にいる、というのである。耕齋の箱館出港説が信じられないのは、耕齋は漁師ではなかつたこと、アムールの河口にいたことはなかつたこと（森有礼『航魯紀行』に「黒竜口に行き、暫時滞りしとそ」とあるのは明白な誤伝である）、この報告書が公刊された一八五六年八月には多分ペテルブルグに到着していたと思われれること、などの理由による。プウチャーチンの報告に間違いがなければ、彼の使節団は耕齋のほかにもうひとり日本人をともなつて帰国したことになる。

耕齋の生涯で最もスリリングな瞬間を次のように描き出している資料がある。「ロシア人がバラツクから米船へ乗りこむ時、彼を大きな櫃の中へ入れて、荷物のやうに見せかけて船まで運んだ。さていよいよ出帆の日になつて船へ検視の役人がきた時に耕齋に水兵茶番用の赤毛の鬘を冠らせて、毛布をきせて後向きに寝かせ、伝染病にかかつた水兵だと云つたら、役人は顔をそむけて立去つた」（平岡雅英『維新前後の日本とロシア』。伝染病云々は、明治の初めニコライ神学校を出てロシアに留学した岩沢丙吉が当時の水兵の子から聞いた話であるという。

密航日本人橋耕齋を乗せた船は安政二年（一八五五年）六月一日に戸田を出港した。この前年米国軍艦によって出国を企てて失敗した長門藩士吉田寅次郎は、このとき萩で幽囚生活を送っていた。

三

日本を離れた日から、耕齋の生涯の第二期がはじまる。耕齋を連れ去つた船は帰国のためにロシア側が備つたもので、ドイツの船籍を有し米国旗をかかげるグレッタ号であつた。戸田でつくられたスターナー船戸田号は二月あまり早く、プウチャーチンらに乗せて戸田を出航していった。グレッタ号は沿海州に向かつた。耕齋は「富士山の影が段々雲間に薄くなる時には是が日本の見納めかと涙が出た」（志賀浦太郎『昔語り』）。ところがこの船は目的地を間近かにひかえた北樺太の沖で、この海域を遊弋していた英国海軍の軍艦に拿捕されてしまった。クリミア戦争は極東でも戦われていたのである。ゴシケーヴィチと耕齋を含む百名ほどのロシア人捕虜は英国艦バラクレータ号に移乗させられ、箱館、長崎を経て（上陸は許されなかつた）、香港へ運ばれた。捕虜とはいえ、行動の自

由はかなりみとめられたようで、たとえばゴシケーヴィチは香港で「保釈」され、のちに『香港——一ロシア人旅行者の日記から』という紀行文で、当時の思い出を述べている。ゴシケーヴィチと耕齋はその後ロンドンで抑留生活を送り、クリミア戦争の終わった一八五六年三月以後に帰国を許された。捕虜になったのは幸運とは言えないが、そのおかげで『和魯通言比考』が生まれた。この辞書は強制された無為の生活の産物であった。序文に次のような一節がある。「わたしは捕虜として英国の軍艦に九ヶ月乗せられているあいだ、たっぷり閑暇にめぐまれ、それを何らかの仕事にあてなければならなかった。わたしの手もとには、日本の友人たちから贈物として与えられた若干の書籍があった。そのなかには小型の辞書が五冊ほど含まれていた。この和露辞書の基礎にえらんだのはそのうちの最善のものである。」

『和魯通言比考』の底本となった日本語辞書が何であるか、どのような方針と手続きによって編纂がなされたかについては、ここでは述べない。ただ、ひと言だけ断っておく。板沢武雄氏が「訳鍵はメドハーストの英和・和英語彙と共に和魯通言比考編纂に際し単語の選択及び

訳語の当てはめのために有力な参考書となったのであって、和魯通言比考の内容についてザアッと比較して見たところからも、このことが言い得る」(『学鑑』、昭和十四年)と述べて以来、これがあたかも定説のように受け取られているが、これはかならずしも正しくはない。このことは、両者を「ざアッと比較」すればわかることなので、これ以上ふれないでおく。今は稀覯本となっているこの一八三〇年バタヴィア刊のメドハーストの辞書 *English and Japanese and Japanese and English Vocabulary* が、おなじ編者の『華英字典』(上海、一八七九年)とともに、一橋大学図書館にも所蔵されていることだけを付言しておきたい。

しかし、耕齋がゴシケーヴィチの辞書づくりにいかなる役割を演じたかは、やはり明らかにしておかなければならない。ゴシケーヴィチは序文でこう書いている。

「この仕事をすすめるさいに重要な助けのひとつとなったのは、ある幸運な事情によってアジア局に籍をおいている日本人タチバナノ コオサイの口頭による説明と解釈であった。」コオサイには「この人物が石版のための日本語のテキストを書いたのである」という脚注が付

されている。

『和魯通言比考』は評判がよく、出版の翌年つまり一八五八年にはペテルブルグ帝室アカデミーからデミードフ賞を与えられた。ロシアの有名な大富豪の名を冠するこの賞は、一八三一年から六五年まで、毎年、学問・芸術・技術の諸分野でのすぐれた業績に対して授与されていたものである。当時のヨーロッパの日本語研究者たち、すなわちフランスのロニーやオーストリアのプフィツマイヤーらも、この辞書に賛辞をおくった。なかでもプフィツマイヤーは、この辞書の作成に日本人が参加していることを重要なメリットに数えている。しかし、耕齋の役割の過大評価は、ことによるとゴシケーヴィチにとっては不満であったかもしれない。(耕齋の果たした役割のくわしい検討は別稿にゆずるが、辞書のなかの「流転イタシテシマツタ」などの例文には、亡命者のひそやかな感懐がこもっているとみるべきであろう。)

ペテルブルグ大学の『伝記辞書』によると、耕齋は一八五六年にペテルブルグに到着すると、ただちに外務省アジア局に「登録」されたという。そして五七年には九等官通訳として勤務についた。ピョートル大帝が定めた

ロシアの官等表では、九等文官は武官の大尉に相当する。十四年後の七一年には、少佐相当の八等官に昇進した。

おなじ資料にしたがうと、耕齋は一八五八年の一月に洗礼を受けてロシア正教会の信者となり、ウラジミール・ヨシフォヴィチという名を与えられた。ウラジミールはいわゆる洗礼名、父称のヨシフォヴィチは教父をつとめたゴシケーヴィチの名ヨシフにちなんでいる。すなわち「ヨシフの子」を意味する。受洗と同時に、耕齋は「上申書で述べているように、仏教の痕跡を含む日本姓(増田)を、ロシア的な姓ヤマトフ——これは日本の古名に由来する——に変える必要をみとめた」という。この「上申書」がどのようなものであったかはわからない。ゴシケーヴィチはこの年の夏に、領事として日本に赴任すべくロシアを出発しているので、彼が、庇護者なきあとの耕齋の身を案じて、改宗をすすめたのであろう。ロシアの習慣では、正教会の信者となることは、帰化したにひとしい。

耕齋はロシア外務省の官吏として何回か外国に出張する機会があったらしい。『大日本人名辞書』に次のような記事がある。「安政年間甲齋露国の外交官に随ひて欧

州各国を巡廻し遂に印度に入るや予て仏教に帰依するを以て釈尊の墓に詣でかの有名なる菩提樹の根を切取し携へ帰りて一聯の念珠を造り常に帯びて手を放さずと云ふ。」この記事を裏付けているのは、掛川太田藩にあって家老を勤めた橋爪氏の子孫の矢田部盛穂氏から木村毅氏にあってた書簡の一節である。「小生の親類の者が嘗つて印度に滞留中、ベレナスといふ所にあるベレナス寺に詣でたるに、自分が日本人である所から、寺僧が参詣人名簿を見せて、此の人を知つて居るかと問はれたるを見れば、タチバナカウサイと記してあつて、此人は露国の官吏として此地に在留し、領事をつとめたりしとの説明を受けたる事ありとの事……」署名の件はともかく、耕齋が領事をつとめたということは、信用しかねる。

もうひとつは、先にもふれたが、万延元年（一八六〇年）に幕府の使節としてアメリカ合衆国を訪問した新見豊前守正興の従者玉虫左太夫の記録である。平岡雅英氏や内藤遂氏によると、玉虫の『米航日記』に次のような記事があるという。「五月十七日ニウヨウチスにありける時ロシア軍艦来る。上下七十五人上陸しける。その人々丈高く色白く眼瞳青色なり。其内一人丈五尺二三寸なる男、眼瞳黒して色白

き人ありけるが衣服はツ、ボにてありけれども、日本人の顔色に似たりけるにぞ、我速に進みより、其許は日本産に非ずやと問ひしかば、其人答へ、然り七ヶ年前日本の伊豆の下田に於て、ロシア国のミニストル・フーチャチンに會して入魂になり、同人に随ひロシア国に至りけるなり。」

いかにも劇的なシーンであるが、この記事に疑念もたれるのは、まず第一に玉虫左太夫の紀行文として有名なのは『航米日録』であつて、『米航日記』は知られないこと（むろん『航米日録』の各種の刊本には右の記事がない）、次に使節一行は四月二十八日（邦曆）からニューヨークに滞在し、五月十三日ニューヨークを出港、十七日にはナイヤガラ号に乗つて大西洋を航行中であつたこと、左太夫はおおむね「ネウヨルク」あるいは「ネーヨルク」と表記しており、「ニウヨウチス」という書き方をしていないこと、使節一行のさまざまな日記類にもニューヨークでロシア人やロシアの軍艦を見たという記述がないこと、などの理由による。右の引用の後で、耕齋が「只今はロシア国にありて重く用ひられ、重役をつとめ、且大学校を預るなり」と語るのも不審である。一

八六〇年には耕齋はまだペテルブルグ大学に出講して
なかつたはずである。

後述するように通訳としてあまり有能であつたと思
えない耕齋が、なぜインドや米國に派遣されたのであ
らうか。耕齋の外國出張が事実とすれば、ゴシケーヴィチ
の不在中、彼の漢字の知識が必要とせられたものにちが
いない。

耕齋はペテルブルグにあつて日本政府の使節を三度迎
えた。最初は文久二年（一八六二年）、次は慶応二年（一
八六六年）、最後は明治六年（一八七三年）である。文
久二年の使節は竹内下野守保徳で、開市開港の延期と樺
太國境画定の延期を申し入れるために、西歐諸國からロ
シアにまわつたものである。耕齋は故國からの使節団の
前に終始姿をあらわさなかつた。しかし陰にあつて接待
を受けもつたことは、このとき竹内保徳の副使であつた
松平石見守の従者市川渡の『尾蠅歐行漫録』の次のよう
な記事から明らかである。「露艦の（房室几上に両三書
籍あり。中に和魯通言比考と題し、橋耕齋彙輯とあり。
作者我邦人に非ざるを得んや。此三四年前の著者なれば
彼地に既存する亦疑無かるべし……（ホテルの）每房几

上には和魯通言比考一冊、墨羽筆料紙封筒折封刀子を備
ふ。又一几上には邦産の糸煙草并巻煙草を置。又傍に刀
架一箇あり……」

竹内保徳の一行には福沢諭吉も随員として加わつて
いた。このときの紀行文である『西航記』に「館内の処置
専ら日本の習俗を用ゆ。室内えは刀掛、日本の枕、煙草、
洗手場えぬか袋等備へ、食物も勉て日本の料理を用ひ、
箸、茶碗等は全く日本と異なるなし」とあるのは、市川
のこの部分の欄外に「起来就食々終眠 飽食安眠過一年
他日若遇相識問 欧天不異故郷天」という詩が書きつけ
られている。『福翁自伝』ではこのときのことの次のよ
うに回想されている。「段々接待委員の人々と懇意にな
つて種々様々な話もしたが、其節露西亜に日本人が一人
居ると云ふ噂を聞た其噂は、どうも間違ひない事実であ
らうと思はれる。名はヤマトフと唱へて、日本人に違ひ
ないと云ふ。勿論其噂は接待委員から聞たのではない。
其外の人から洩れたのであるが、先づ公然の秘密と云ふ
位な事でも、チャント分つて居た。其ヤマトフに遇つて見
たいと思ふけれどもなか／＼遇はれない。到頭逗留中出

て来ない。……噂の通り何処にか日本人の居るのは間違ひない、明に分つて居るけれども、到頭分らずに帰て仕舞ひました。」

福沢のニュース・ソースのひとつはフランス人のロニーではあるまいか。福沢はパリでこの日本語学者と知り合つており、ロニーは日本人を追つてペテルブルグにたずねてきた。『西航記』には「唯余輩を見ん為めに来る。歐羅巴の一奇士と云ふべし」とある。ロニーは『和魯通言比考』の書評を書いていたので、耕斎のことをよく知っていたにちがいない。

それから五年目、耕斎出国からは十一年後に二度目の使節がやって来たときには、すでに事情が變つていた。小出大和守秀実を正使とする慶応年間の使節団は、前回の交渉で延期とされていた樺太国境の画定を目的とするものであった。その前年の慶応元年には、ゴシケーヴィチが日本から帰国していた。そのあとを追いかけるようにして、慶応二年の初めには、幕府から派遣された六名の留学生がペテルブルグに到着した。この年の夏にはイギリス留学中の森有礼らが夏休みを利用して露都をおとす。耕斎はこれらの人々から、日本の国内情勢の變

化を聞かされていたにちがいない。今度は表面に出て、日本の使節団をもてなしている。明治二十二年大同新聞の野口北巖氏の耕斎略伝はこのときのエピソードを次のように伝えている。「幕府使節小栗某（小出の誤り——中村）等露国に至るとき、甲齋は其接伴掛となり、外務大臣は帝室の馬車を出して使節の一行を迎へしめんとす、甲齋は宜く上等下等の二様の車を備ふへしといふに、同大臣は同一のものを用ひて可なりといふ、甲齋告くるに日本国の法は魯国と異なることを以てし、使者には必ず厮養の従へるあり、此の賤者をして宮車に乗らしめは使節に対し礼を失ふに当れり、若し某掛りたらすんは妨げなきも、苟も掛を命せられし以上は、不都合と知りつゝ、黙従すること能はずとて、遂に兩様の馬車を出したるに、果して厮養若干人あり、大臣は甲齋の措置宜きを賞賛し、其事了りて後厚く賞与に及はれぬ、日本使節も亦甲齋の本人たるより、諸事便宜を得たるを喜び別るゝに臨み相携へ写真して記念となせり（其写真を見るに、使節は結髪袴羽織に双刀を帯ひ、紙緒の草履を穿ち、甲齋は魯国の官服なり）。耕斎の硬骨を伝えるこの話はほかの資料には見えない。またここでいう写真は、残念ながら筆

者未見である。

小出大和守の随行者のなかに志賀浦太郎がいた。彼は長崎稲佐の庄屋の息子として天保十三年（一八四二年）に生まれ、少年時代郷里でロシアの海軍士官についてロシア語を習得し、のち箱館におもむいて領事ゴシケーヴィチの通訳を勤めた。すでに何回か引用した『昔語り』は、大正の初めに彼が長崎日日新聞の記者に語った懐旧談である。彼はすでに日本にいるときからゴシケーヴィチに耕齋のことを聞き、『和魯通言比考』も一部与えられていたという。したがって彼はペテルブルグで耕齋と会うことを予期していた。「扨て一行が露都に着すると停車場に一人の日本人が出迎に来て居る。是は橋耕齋と云ふ男……耕齋は言はゞ売国奴で今は日本人でない露西亜人になつてゐる訳だから向うに行つて耕齋に面会しても日本人として取扱はず言語も露西亜語でやらうと話を極て居たので、露西亜語で話しかけると、耕齋は日本語で返事する。其れから私等一行の旅館に朝早くから来て夜遅くまで世話をする。後で聞いて見ると耕齋は一向露語が出来ないで役に立たぬ、外務省でも持余して居たが、今回日本から使節が来たので賄の世話を命ぜられたの

だ、其れでも本人は久し振りに日本人に面会したので嬉しくて溜らぬ、大変喜んで居たが愈々談判が終つて使節一行が帰国する時には日本に帰り度いと口癖のやうに言つて居た、然し売国奴を連れて帰る訳には行かず、何れ折があつたら帰国の出来るやう尽力するからと慰めて出発したが停車場に見送りに来て汽笛が鳴つて汽車が動き出すとワツと声を放つて泣き出しブラツトホームに泣き倒れた……」

右の回想を新聞記者に語ったとき、浦太郎はすでに七十三歳（その翌年に没した）、小出使節団に加かつて訪露したときから五十年あまりたつてゐる。むろん記憶の細部にわたつての正確さは期待できない。また、耕齋を「売国奴」と極めつけていること、彼がロシアに帰化したことにひどくこだわっていること、概して耕齋に対して敵意に近い感情を示していることは、日露戦争後に高揚したナシヨナリズムのプリズムを通して、はるかな青年時代をふり返っているためではないだろうか。もうすこし勘ぐれば、耄齡の語り手が孫のような新聞記者にむかつて、話を面白くするために興味本位の作為や潤色を全くほどこさなかつたとも言えまい。

ともあれ、志賀浦太郎の『昔語り』は明治六年の岩倉具視使節団以後のことにもふれているから、引用をもうしばらくつづけよう。岩倉使節団は米国や西欧諸国をまわって、最後にロシアをおとすれたのである。「岩倉大使一行が欧米へ差遣された時には……大使に耕斎の事を詳しく頼み込んで置いた、後に露都に日本公使館が設けられ（明治七年に榎本武揚が公使として着任した——中村）、私が書記官で在勤して居る時に漸く帰国が叶ふやうに成つた、旅費として日本政府から千円を給し露国政府からも同じく千円を給し其上露国政府からは年金三百留を耕斎に給することに成つた、其時は榎本公使、花房一等書記官が在勤して居たが、愈々耕斎が十九年振りに帰国する事に成つたので公使館に招いて送別の宴を開いてやつた、其時の耕斎の喜びは非常なもので、前生の罪科を罪亡しに物語ろうと一切を懺悔した、妊婦殺しや贖医者等の事は其時に聞いたが其外実に驚く可き事ばかりで一座の者は悉く呆れ果て、仕舞つた」。この証言にも、とくにその後半には、すでに述べた理由によって、あえて存疑の符号をつけておく。

『岩倉公実記』や『木戸孝允日記』に耕斎の名は見え

ないが、岩倉具視が耕斎に帰国をすすめたこと、あるいは帰国の許可を与えたことは、確かであろう。「大日本人名辞書」は言う。「明治六年我全權大使岩倉具視の一行欧州を巡りて駕を露京に駐むるや甲齋屢々其の旅館を叩きて謁を乞ふ大使之に面して切に其の帰朝を促がす甲齋依て願ふ往年伊豆国を去りてより正に二十余年天外万里の客と為り郷信既に絶ちて双鬢漸く白しと懐旧して心動くに際し大使の随行員等皆な曰く故国の文明日に進みて全く昔日の觀を一変せりと是に於て甲齋帰思転た切にして禁ずる能はず遂に事由を具して露政府に上申し帰国を乞ふ」。こちらでは耕斎はむしろ受動的な態度をとっている。確實に言えることは、耕斎自身の意志とは別に、キリスト教に対する禁令が解除された明治六年以後になって、はじめて彼の帰国が可能となったということである。なお、この『人名辞書』に「大使の一行と共に露京を発す」とあるのは明らかな誤りで、耕斎の帰国は岩倉使節訪露の翌年、明治七年である。

四

耕斎の生涯の第二期すなわちロシア時代は、資料が最

も豊富に存在する時期である。日本出国以前の経歴も、ほとんどがこの時期の知人たちが耕齋から聞き知ったのであった。その知人とは、まず「遣露伝習生」の幕臣山内作左衛門、市川文吉、緒方城次郎ら六名、ついで薩摩の遣英留学生森有礼と松村淳平、公使館関係の志賀浦太郎、その他（一八七一年の初めペテルブルグにおもむいた金沢の嵯峨寿安のごとき人物も含まれる）である。

耕齋が山内らの留学生を親身になって世話したことは、彼の日記や父親への書簡に述べられている。「橋耕齋と申もの面言仕候、当時ワジミール ヲシボウキチ ヤマトフと号居、一年五百ルーブルの給金をもらひ居申候、日本にても中々所々を渡候ものにてすこふる苦勞人に御座候、此地にても如才なくよき身分の人々と歩行居候様子に候、此もの罷在候にて国風も相わかり大に都合よろしく御座候、」
「橋耕齋と申もの……私共為には日本にての罪をあかなひ候為にとて至つて親切にせわいたし候間、魯国の様子も相分り万端都合よろしく御座候」
しかしこの山内も耕齋の教養に關しては、「俳諧などは少しく学びしものとみえたれと學問は和漢共に深き事はあらざるへくおもはれたり」「何もかも少しつゝ手を

出し候ものと相見候か、さして深き事は無之候」「文事もよく氣を付候男に候へ共間に合學問にて日本學漢學ともに□へ學問に候」と、低い評価しか与えていない。山内自身は、歌人であり有職故実に通じた山内豊城の二男、幕末の蘭医として知られた佐藤泰然の甥で、ひととおり學問は身につけた人物であつたらしい。天保七年（一八三六年）生まれであるから耕齋より十六歳の年少で、このとき三十歳、ただし六名の留学生のなかでは最年長であつた。（ちなみに、緒方城次郎は二十二歳、市川文吉は十九歳、他の三人は十六歳以下の少年であつた。）

山内の日記によれば、耕齋は一八六六年の二月二十三日にも山内らを訪問した。これはロシア曆では復活祭の日でもあつた。正教國では嚴寒期のクリスマスより、春のおとずれを告げる復活祭が最も盛大に祝われる。ヤマトフ耕齋はおそらく教会からの帰り道で、正装に威儀を正していたことであろう。微醺を帯びていたかもしれぬ。その耕齋に山内はたむむれに一首の和歌を呈した。

異國も天のしたをしはなれぬになと日のもとを

わすれはてけん

問いかけの歌である。とりようによっては、詰問の調

子さえ感じられる。

これに対して耕斎は

東風ふきしるしやけふの郷の友

と返して立ち去った。軽くないとしたらうべきか。

山内は病氣のために翌年の三月、小出使節団といっしょにペテルブルグを離れた。後に東京外国語学校教授となる市川文吉は、このときの留学生のなかで最も長くロシアにとどまり、明治六年岩倉使節とともに帰国した。

耕斎とは八年あまり露都で往来したはずであるが、その交友関係を示す資料は伝わっていない。しかし、大槻文彦が明治末年に入手した市川文吉旧蔵の『和魯通言比考』は、白紙を多くはさんだ特製本である。現存するもののなかでは編纂者ゴシケーヴィチの手沢本だけがおなじタイプであるところから、市川がもっていたのは、かつてこの辞書の共編者たる耕斎が所有していたものかもしれない。

板沢武雄氏がオランダ留学中に、メドハーストの例の『英和・和英語彙』を入手したが、その見返しに次のような書込みがあり、巻末には和歌がしるされていたという。

皇朝二千五百廿六年寅文月

魯都ヒードルヒルクニ遠遊之節

橘大和夫贈之

和英対訳書

2526 years since Japan was accurately known

和歌は次の二首、

目にみえぬ神のみことの神事はかしこきものぞ

おほにな思ひそ

天地の神のめぐみしなかりせばひとひひと夜も

有得てまじや

皇紀二千五百二十六年は慶応二年、一八六六年である。

この年にペテルブルグに「遠遊」したのは、すでに何回もその『航魯紀行』を引いた森有礼と、その同僚松村淳平である。この二人はその前年に薩摩から留学生として英国に派遣された者たちであった。彼らは夏休を利用して八月（邦暦七月）に一週間の予定でペテルブルグを訪問したのである。後に文部大臣となる森はこのとき十九歳であった。おそらく森か松村のどちらかが、この辞書を耕斎から贈られたのであろう。歌の作者はわからない。山内らの幕臣たちもこの地で森たちと交わっている。

耕齋がロシアにあって「一向露語が出来な」かったというのは志賀の言であるが、これはどうやら事実であったようである。山内書簡のひとつにも、「魯学は不学のよし出来不申候、しかし十年も居候間言葉教を多く覚え居、とうやらこうやら通弁いたし居申候よし」とある。

語学に関する限り、耕齋は恐ろしく不器用であったとみえる。「魯学は不学のよし」というのは、最初から積極的に覚える気がなかったということであろうか。耕齋の身近かにあってその日常に接した者のこういう批評をみると、『大日本人名辞書』の「居ること数年にして精細其の国語に通じ」という記載、石井研堂氏の「耕齋は語学の天才であつたらしく、魯都に在ること未だ幾らにもならぬのに、早くも魯語に通じ」という文章は、事実と全く相反することがわかる。いったい、語学の能力というものは、最も誤解されやすいものである。『和魯通言比考』成立のさいの耕齋の貢献度を測る場合、彼のロシア語知識上の制約を考慮しなければならぬ。

耕齋はロシアでは、ペテルブルグ大学の最初の日本語教師としても、名を残した。一八六〇年代すでにヨーロッパでは、パリとウィーンの大学で日本語が講じられて

いた。そこで一八七〇年にはペテルブルグ大学でも、東洋学者として知られたワシリーエフ教授の提唱によって中国・蒙古学科で日本語が教えられることになり、耕齋は無報酬で教師となることを承諾した。耕齋の講義はこの年の十月に開かれ、帰国の年の五月までつづけられた。これは『ペテルブルグ大学教授講師伝記辞書』が明らかにしていることである。日本語教師として在職した四年間の業績は、とくに知られない。耕齋帰国後の後任には、駐露公使館付の留学生西徳三郎が就任した。

耕齋が勲賞を授与されたことは墓誌に「帝賜以素堂爾叔王武第三等勲賞」とあることから、明瞭である。スタニスラフ勲賞は元来ポーランドの同名の王が一七六五年に制定したもので、十八世紀末のポーランドのロシアへの合併後はロシア皇帝からポーランド人に与えられ、一八三一年からロシアの賞勲制度に正式に組み入れられた。耕齋のころには一等から三等までの等級があり、二等だけがさらに上下の別をもっていた。耕齋がいつ、いかなる理由でこの勲賞を与えられたかは、今不明である。

耕齋はロシア滞在中に『国史略』なる書を翻訳出版し、また、ロシア婦人と結婚して二人の男子をあげたという。

これを初めて伝えているのは平岡雅英氏『維新前後の日本とロシア』(後に『日露交渉史話』と改題)である。しかし耕斎のロシア語の方が「どうやらこうやら」日常生活の用を弁ずる程度のものであったとすれば、とても書物の翻訳が可能であったとは考えられない。ロシアやソビエトで刊行された日本関係の文献目録にも、これに該当する項目を見出せない。結婚問題については、否定あるいは肯定すべき根拠がない。もしこの「二人の男子」が実在したとしたら、今なおロシアにヤマトフを名乗る一族が残っている可能性がある。

耕斎がおそらくロシアで撮影したと思われる写真が少なくとも二葉伝わっている。第一のものは、やや斜に構えた胸から上を写したもので、左端に「橋耕斎」の墨書がある。服装は洋風の上衣の下に白いシャツを着け、黒ネクタイが花むすびに結ばれている。額は高くはげ上がり、口ひげは半白である。鼻の両わきにはふかい皺が刻まれ、眼差しは鋭さのなかにも、初老に達した人間のものがもちうる落着きを宿している。第二の写真は椅子に腰をかけ、ななめ前を向いた全身像で、テーブルに右ひじをつけて頭をささえ、右手にペンをにぎっている。テー

ブルいっばいにひろがり縁を乗りこえて下に垂れているのは新聞であろうか。黒いフロックにハイカラーの白シャツを着用し、やはり花むすびのネクタイをつけている。顔がややうつむき加減のせいか、この写真の印象は明るいものではない。

五

耕斎は明治七年九月に日本に帰った。ときに五十四歳。このときから彼の生涯の第三期がはじまる。

彼の帰国をいち早く報じているのが、すでに何回もふれた郵便報知新聞十月二日の記事で、二面の投書欄に「蕉逸子新論の三」として掲げられている。その内容は徹頭徹尾、耕斎に対する揶揄と嘲笑であるが、最後の部分はこうなっている。「(魯帝から)賞金若干賜ひたる其上に生涯隠居料として二百ルーブルを年々下さることに取極られた全権公使の添翰迄て請戴きて今般故郷に飾る錦の浦島子ザンギリあたまの霜降老人外務省へ御届の次き早速根津の旧里を尋れば馴染の女郎は如何せしや。」例によって、この文章をうのみにはできない。とりわけ根津の女郎のくだりは眉唾ものである。年金二百ルー

ブルも誤りで、墓碑にいう三百ルーブルが正しい。

明治八年七月に出版された山口謙著『近世史略二編』

卷二、九月の項にも「此月元掛川藩橋康哉魯国ヨリ帰朝ス云々」の記事が見える。耕齋の帰国は、一部の人々の注目するところであつたのである。それにしても、耕齋のロシア名がどちらの記事でも、ヤマトフであるべきところを「大和スケー」と間違えているのは、なぜであらうか。耕齋自身が自分の名をそのように伝えたとは考えられない。情報というものの頼りなさの一面がここにあらわれている。この頼りなさは、単に一固有名詞の形にとどまらぬこと、あらためて指摘するまでもあるまい。

耕齋の帰国は故郷に錦を飾る底のものであつたであろうか。郵便報知の記事の調子からみて、少なくとも彼を待ち受けた一部の世評は、かんばしからざるものであつたことは確かである。『近世史略』の論調はより客観的で、筆者の好悪の感情は表面に出していない。これもまた、ひとつの迎え方であつた。これに組する者は、耕齋の前歴についても「天保年間江戸ニアリ嘗テ人ト鬪争シテ潜クル」と受け取っていて、いわゆる「旧悪」をほとんど問題にしていない。

耕齋自身の気持はどうであつたか。この場合もまた、

彼自ら書き残したものはないので、伝聞にたよるほかない。「従是杜門絶交、優遊養老不事人事」と墓碑は語る。

これではあまり簡潔にすぎるので、『大日本人名辞書』を参看すれば、「既にして日本に帰り来るや勇退世を謝し纔かに膝を容るるの小室を芝山内に営みかの念珠を爪繰りて朝夕仏を念じ経を読みてまた余念なし其の風采を見聞するもの皆慎まざるなく貴顕往々駕を枉げて其の庵室を叩くと云ふ嘗て人あり庵に就き勸むるに仕官を以てするや甲齋辞して曰く拙老既に此の世に所望なし且つ脱離埃土の身を以て世の貴顕に対し礼儀を粧ふは堪ふる所にあらざるなりと固く謝断す依りて来訪する者漸く絶ち偶々就きて其の履歴を問ふあるも更に語らず是を以て世間甲齋の経歴を詳かにするもの甚だ稀にして其の近辺のものも雖も認めて只々仏道三昧の老人とのみ思惟すと云ふ。」この内容は、これより早く郵便報知新聞明治十九年三月六日に掲載された無署名の記事と、逐語的に一致する。また、本郷の野口北巖氏寄稿の明治二十二年八月十六日付大同新聞の略伝は、全体として郵便報知よりかなり傾向的であるが、耕齋生涯の第三期に關しては大き

な相違がない。

これと全く対立的な見地に立っているのが石井研堂氏の「怪僧橋耕斎」なる紹介である。すなわち「甲斎の帰朝は、正に明治維新の黎明期、人物弘底の好時機であった。甲斎或は、我一たび帰朝すれば、顕要の椅子を得るも易く、少年時代の夢想を実現し得べしとの野心が有ったかも知れない、が、当時わが国民の思潮は、魯国の文明を英米仏独程には高く買はず、又駟落ものたる甲斎であり、雄藩の後楯のなかつた悲しさには、事は志と一致しなかつた、で、甲斎は、所謂世のすね者となつて、一切世間の交りを絶ち……」この行文は誤解を生じやすい。耕斎に「顕要の椅子を得」て少年時代の夢を実現させる野心が「有ったかも知れない」という推量を前提にしなから、結論は断定的になっているからである。ほんの少し注意すれば、「事は志と一致しなかつた」という事態ではなかつたかもしれない、耕斎は「所謂世のすね者」ではなかつたかもしれないことがわかる。庵室にこもる者は、「すね者」とはかぎりぬからである。「門を杜し、交りを絶つ」者を一概に「すね者」と呼ばなければ気がすまぬのは、世間の狭量である。

なぜ耕斎は世を捨てたのであろうか。ロシアで日本人留学生の面倒をよくみたのは「日本にての罪をあかさない候為」であつたと、山内作左衛門は報じている。新帰朝者にして「世を謝し」たのも、やはり罪をあがなう意識がはたらいた結果であらうか。眞実はすでに謎の闇にとざされている。耕斎の遁世がもし贖罪を目的としていたとすれば、その目的は彼が自らに課したふかい沈黙によつて、そしてその沈黙によつてのみ、完全に果たされたといわなければならない。

帰国とともに、ロシア正教徒がふたたび仏門に復帰した理由を説明する資料もない。耕斎はかつて武士という身分にこだわらず、ついで日本という祖国にこだわらず、ついには世間にこだわらなかつた。求道者としては宗教の別にこだわらなかつたというべきであらうか。仏僧としての態度も潤達である。日本を離れる前に幹事になつた池上本門寺、戸田で仮寓した蓮華寺とともに日蓮宗、帰国後に庵をいとなんだ芝増上寺は浄土宗、菩提所の芝源昌寺は禅宗である。

帰国後の耕斎の暮らしぶりについても、石井説は「耕斎を知つて居た者の話では、帰朝当時の耕斎の手廻り物

には、彫金鏤玉、目を驚かす華麗のもの多く、生活また甚だ華麗を極めたさうだ」とする。しかし、年金三百ルーブルで「華奢を極めた」生活が送れるかどうかは疑問である。彼はかつて九等官通訳として年俸五百ルーブルを得ていた。山内書簡では、そのころロシアでは女の料理人の月給が八ルーブル、下男のそれは五ルーブルであったという。これはおそらく賄付きであろう。三百ルーブルの年金は退職下級官吏がようやくつましい生活を送るに足る程度のものであったにちがいない。明治年間の為替相場で三百ルーブルはほとんど三百円に相当し（月割りにすれば二十五円）、よしんば所得にくばくかの剰余が生じたとしても、「露国より受る所の年金は、僅々たる生活の費を除き、贏余は親戚縁故に分ちて、家に一銭を貯へす」（野口北巖氏、大同新聞）という生活が、より実状に近かったのではあるまいか。

耕齋の晩年の知己としては、まず墓誌銘の撰文者長瀬義幹をあげなければならぬ。彼は「余与君有平生之知、碑銘之請不可辞」と二人の関係を述べている。ついで、ロシア時代から交際のあった市川文吉が、日本に帰った耕齋と親しく交わったという（内藤遂氏『遺魯伝習生始

末』。本郷に居住した野口北巖は、「余は両三度逢ひたりしも、後幾程もなく、甲齋身まかりぬれば、詳かなることを知るによしなし」と告白している。

耕齋は帰国してから結婚したが、実子がなかった（墓誌に「君無嗣、婦某受後」とある）。明治十五年に旧加賀藩の河島鉄三郎を養子に迎え、遠縁の遺族が今八丈島に居住するという報告がある（吉田武三氏『北方の空白』）。

耕齋の全生涯を通じて最も因縁のふかかったゴシケーヴィチは、耕齋帰国の翌年にあたる一八七五年、隠棲地のリトワニアのヴィリナ（ヴィリニウス）で没した。享年は六十四歳。遺著『日本語根論』は息子のヨシフによって一八九九年に出版された。

耕齋は帰国後十二年目の明治十八年、六十五歳で世を去った。その臨終のもようは次のとおりであった。「明治十八年五月微恙あり予め其の死期を知りて更に菓餅を喫せず其月三十一日味爽家人に向ひて曰く我れ今日を以て死すべしと語り畢りて仏に対し高声経を誦し巻を終りて安然瞑目す之を觀るに顔色変せず微笑を帯びて猶ほ生けるが如しと云ふ。」これ以上安らかな死のかたちは考えられない。

耕齋は源昌寺に葬られ、翌明治十九年に墓碑が建てられた。そこに刻まれた銘は、

能殺人者又能活人 出士入仏為異邦賓

去就飄忽氣宇嶙峋 大和夫称永見精神

飄忽は風の疾きさま、嶙峋は山の重なりてふかきさま、であるという。

(つけたり)

一、十九世紀末のロシアの恩給制度によれば、三十五年以上の公職勤続者に対して、最低八十四ルーブル九十コペイカから最高千二百二十ルーブル八十三コペイカまでの年金が支給されることになっていた。二十五年間勤続者が退官した場合には、その半額しか与えられなかった(ブロックガウス百科辞書による)。耕齋の官等、勤務年数を考えれば、三百ルーブルの年金は破格の待遇とい

わなければならぬ。

二、チェーホフの初期の短編小説『でぶとやせ』(一八八三年)のなかに、主人公のひとり「ぼくは勤めているんだよ、君。八等官になつてもう二年目で、スタニスラフ勲賞ももっている。給料はわるいがね……」と述べるくだりがある。耕齋は帰国する三年前に八等官にすすんでいたので、勤務上特別の功労があつて、スタニスラフ勲賞のなかでも最下級の第三等をさずかつたというわけではなかつたものと想像される。

本稿はさなきだに叙述が混乱錯雑しているので、史料の出典を逐一明示する注をつけなかつた。ひろくは日露交渉史、せまくは橋耕齋に関して、いままで多くの業績が発表されているが、ここではとくに、木村毅、高野明、内藤遂、西村庚、丸山直祐、吉田武三の諸氏の調査ならびに研究に負うところが多かつたことを、感謝をこめて、付記しておく。

(一九七〇・一・一五) (一橋大学助教授)